

被爆を語り継ぐ

——
聞き書きボランティア活動記録
——

少女からの贈り物

語り手 竹内 勇

沼袋二丁目

はじめに

私は一九一九（大正八）年福島県に生れて、一九二六（大正十五）年、七歳の時家族と共に上京、目黒に住んだ。一九四一（昭和十六）年二一歳で兵役により、北支那（現在・中国華南省）に出征した。家族は一九四三（昭和十八）年中野区沼袋町に転居し、現在に至っている。

私が兵技下士官になった時、特攻隊要員として広島^{あかつき}の鯛尾（現、坂町・宇品港対岸）に基地のあった、^{あかつき} 砲部隊に転属を任命された。砲部隊では整備業務も受け持っていた。マルレという二人乗りのボートの少し大きい、一人乗り舟で両脇に爆薬を抱え、敵艦に激突し、乗組員とも自爆するという戦術だった。

その舟を造る材料も不足していて、舟は薄いベニヤ板で造り、エンジンは全国から徴発した自動車から外したもので組み立てた。試作した舟同士で競争させ、早い舟が採用されていた。鯛尾の東後ろは山で、西北方面に広島市内が一望できる場所だった。対岸の宇品港まで船で十分程でいった。

昭和二〇年八月六日午前八時十五分、広島市内に原子爆弾が投下。鯛尾から爆心までの距離は八キロほどだった。

私は思い出すのが嫌で逃げていた。五〇年忌を期に、迷ったが話しておこうと思った。私も長くないし、語り継ぐ意味でも必要であろうと考えた。たくさん話は本にも出ているが、一人一人の体験はそれぞれ違うので、参考になればと思う。

ピカドン

八月六日朝兵士を集合、整理させ、下士官である私はその列に面して立っていた。私一人だけが広島市のほうに向いた位置だった。出ていた空襲警報が解除された直後、八時十五分頃、広島市上空にパーッと閃光が走った。その光は強烈で発作的に顔を手でおおった。電気溶接の時アーク棒が発する青い光のようだった。鉄でも溶かす高熱のような色だった。

五秒ほど後に、ものすごい音と爆風が我々を襲った。爆風は兵舎を吹き抜けるように荒れて、一メートルも先が見えないほど、埃でいっぱいになった。整列していた兵隊たちは、真近に

爆弾が落ちたものと思い、クモの子を散らしたように防空壕に走っていった。

恐る恐る市の方を見ると、火の玉が膨れ上がり、見る見るうちに大きくキノコ状の雲になって、地上のものすべてを吸い上げるようだった。その雲は空の雲と合体した形で、二時間以上消えなかった。その色は真っ白の完全燃焼そのもので、数百メートルは吹き上げていた。その白さはこれ以上の白はないと思わせる色だった。そして、その中に赤い色の炎がメラメラと燃えるのが見えた。

鯛尾から見える広島市は、一瞬にして爆煙に包まれ、建物は次々に燃えだした。宇品の方を見ると大きな家屋はほとんど無くなり、いったいどうなったのだと思った。最初は焼夷弾か、爆弾がガスタンクに命中したのではないかと思った。しかしやがて、軍情報で特殊爆弾だとわかった。この後、空襲警報発令時には身を守るために、白い布や敷布を頭からかぶれと言われた。

爆心付近の状況、救助

原爆が落ちた直後、軍から非常呼集がかかり、住民救済の命令が下りた。持っていた舟艇、救助隊が動員され、広島警備司令部が設置、暁部隊が主力になった。私たちは保管していた何隻かの舟に乗り、川沿いに市内に入ったが、正に生き地獄のようである。我先に舟に乗り込む人達で大変だった。川には遺体も多

く、舟が先へ進めない状態だった。

先発隊が救助した市民が宇品から鯛尾に続々と上陸してきた。皮膚がペロペロにむけ、ただれて、それが垂れ下がった。その両手を前に突き出し、憔悴しょうすいしきった様子で、今にも倒れそうな姿で、無言で兵舎に入ってきた。まるでユーレイのようだった。

その姿にビックリした私たちは、すぐに就寝場所の作成作業に入った。保管してあったヒマシ油をはけで一人一人に塗って寝かせた。しかし、寝かせても腕を下げない人が大部分だった。腕を上げたままでは疲れるだろうと思い、綱を張って支えようとしたが、誰もそうはせず無駄だった。原爆被災で腕の神経が麻痺まひしてしまったのだろうか。

男性は静かで相当な重傷者でも、我慢強いというか、もうだめだと諦めているのか、時々「水を下さい」と言うだけだった。女性は「助けて下さい！ 助けて！」とか「水を下さい！ 水を下さい！」と口々に叫んで、それはかわいそうだった。その中には、移動演劇隊さくら隊の丸山定夫さんもいた。

收容された人々は、空襲警報が鳴るたびに飛び起き「助けて！ 助けて！」と叫び、その恐怖に襲われる姿は異常だった。それらの人々は、次々に高熱にうなされ死んでいった。外見は何でもない人が次の日には死亡し、見回りに行くと隣の人が死んでいると教えてくれ、別室に移すこともしばしばだった。

教えてくれた人も、今度は自分の番かとの思いだったと考えたと深刻な気持ちだった。また多くの人から、「水をくれ！」と言われたが、水を飲まずと死ぬと言われ、飲まずこともできず、かわいそうで、私たちも辛い気持ちだった。

二、三日後冷凍ミカンが配給された。その頃、軍隊は優遇されており、民間では何もなかったが、軍用としては衣類、食べ物、何でもそろっていた。一人二個づつ渡したが、被災者は泣いて喜んでいた。その姿は今でも忘れられない。大事そうに額に乗せて、高熱にうなされながら食べようとしない様子は一言では言えないものだった。

私は下士官の任務もあり、市内中を歩いて被害状況をつぶさに見てきた。爆心近くの被災者の状態は表現が悪いが、焼鳥のように手先、足先は焼け落ち、体全体が焼き肉の色で、目は十センチ以上飛びだし、舌はあごの下七センチくらいまで突き出し、性別はわからず、尻から腸が四メートルほど飛びだしていた。頭の毛もチリチリに焼けていた。それは爆風と熱線のすごさを物語るものだった。多くの市民の他に馬、家畜も同様にあちこちで死んで倒れていた。

学校の窓際で被災したのか、窓ガラスの破片が体に食い込んで、それを取ってもらいに来る学生も多かった。医師が皮膚に触れ「この場所だね」と確認すると、メスで皮膚を切り、ピンセットでガラスの破片を取り出した。葉がなくて麻酔なしの手

術だった。皮膚の表面の傷は小さかったが、深く食い込んでおり、一片取ると出血がひどく、一日一片か二片しか取れなかった。

こんな時でも人間の底力は恐ろしいものだった。爆心に近い紙屋町付近では、被災した人が一面の灰だらけの土地の上に縄を張って、自分の土地を守っているのも見受けられた。その場所を店を開いていた人だろう。こんな時でもと驚かされた。人の力はそこまで有るものかと、その意欲には感心した。見かけた人も、あの傷ではとても助かるとは思えなかった。

市内を通っていた市電も真っ赤に焼けて止まっており、消防車、自転車も同様だった。乗っていた人は吹き飛ばされたのだろう。

瀕死の少女からの贈り物

ある少女が大事そうに弁当を持っていた。「兵隊さん食べて。今朝家から持って出ただけで、私食べられない。もったいなから食べてちょうだい。」と言われた。食料事情の悪い中で、最後まで離さなかった弁当。しかも三、四日経っていることも分らない……私はその言葉を聞いて、泣けてきた。

小さな子供の犠牲も多く、自分の子を亡くした中年の女性は、親と死に別れて被爆で眼をつぶした子供を「これからこの子を私の子として育てる」と言っているのを見た。私は子供の目が直ればいいと思っていたが、あの状態ではおそらくダメだろう。

毎日、何十人と死んでゆくその遺体は、兵舎の裏にむしろで包み、それがうす高くなり、次々と広島湾沖の似島に送られた。

火傷も日が経つにつれて黄色く化膿し、かさぶたを取ると、下からうじが出てくる人も多くいた。うじ虫は膿を食べるから良いのだという衛生兵もいた。これらの人はだいぶん助かったようだ。しかし医者はず少なく、我々素人の治療では手のほどこしようがなかった。薬もなければ、頭を冷やす水も無く、ただ一刻も早い医療体制の整備をと願うのみだった。

市内は水を求める人が川を埋め、家庭用の小さな防火用水の水槽でも七、八人が首を突っ込んだまま死んでいた。その様はバレーボールの試合前のスクラムのようで、異常な様だった。どこに行ってもこんな光景が数多く見られた。いかに水が欲しかったか。最後の力を振り絞って、水を求めながらそこで死んでいったのだろう。悲惨な光景だった。

練兵場の弁当箱の列

爆心に近い練兵場で、各自の弁当を横に置き、学生が朝礼の式なのか、作業前の体操をしていたのか。包んだ布はすべて焼け、アルミの弁当箱がペチャンコにつぶれて焼けているのがきれいに並んでいた。その持ち主はどこかに吹き飛ばされ、焼かれたのか、その時の情景が目に映るようだった。まわりはすべて火の海、たとえ助かったとしても逃げる道はなく、火だるまになって死んでいったに違いない。

犠牲者を路上に並べ、肉親、知人の引取がくるのを待っていたが、日が経つにつれ腐敗し始めた。このままではいけないと、表を作り、遺体ごとに番号を付けて、それぞれの遺体の胸の認識布から姓名、血液型、性別、年齢、身長、特徴のあるものを、表に記入した。認識布の取れて不明の人は、みた形で性別、推定年齢、身長、歯の特徴などを記入し、掲示して、遺体を焼いた。遺骨は一体一体瓦の上のせ、引き取る人の来るのを待った。多くの人が見に来たが、引き取られる人はほとんどなかった。

中にはさんざん探したがわからず、これだけ探したのだからと、似ているからこれにしようといって、遺骨を持っていかれる人もいた。場所によっては数が多くて、一体ごと遺骨にする余裕がなくて、まとめて遺骨にした場所もあったようだ。市内は多くの人が肉親を求め、知人を求めて歩いていた。

終戦になって

終戦になり、軍で待機していたが、医療は民間でやるようになり、する事もなく、船で沖に出て爆薬に火を付けて、魚を取っていた。もともとそこは要塞地帯で魚は豊富だった。復員と決まった前後、貯蔵品の中の日用品をまとめている人もいた。背負いきれないほど、山のように積んで帰る者もあった。

私は九月六日復員となり、中野に帰ってきた。家族は広島市が全滅したとの報道があり、手紙を出しても返事が来ない事か

ら、私も戦死したと思っていたらしい。私は午後十時過ぎに着いた。沼袋町辺りも空襲でだいぶ焼けていた。そのため距離感がつかめず、家を探して歩いた。ずいぶん歩き回って、夜の十二時ころか、この辺ではないかと思う地点で「竹内の家はどこだ」と怒鳴った。とそばで「おう！」と地下から親父の声がした。それで自分の家がわかった。家は焼け、防空壕で生活していた。

そこでの生活が始まったが、ご飯が食べられなくなり、体力が入らず、東大の病院にいつて見てもらった。脊髄注射で血液を取られたが、その痛さに参った。それ以降病院へは行かなかった。その時の白血球値は二万もあった。その後も体の調子が悪く、二年後都立大久保病院にも行ったが、その時は三千だった。ビタミン剤などの薬を飲み、今日に至っている。しかし三〇年間変形性脊椎症で悩まされているが、放射能の影響とは思わないようにしている。

話し終えて

戦争とは本来、国と国、民族と民族の戦いで、軍隊同士間の戦いのはずだ。一般市民がその対象となることは許されないと
思う。たった一発の爆弾で何十万人もの市民を、予告もなしに
殺戮し、多くの被爆者が今でも苦しんでいる。その行為は未永
く語り継がなければならないと思う。そして戦争の愚かさも知
るべきだし、日本はいつまでも平和であってほしいと思う。



聞き書きを終えて

人間、だれでも何らかの悩みをもっているものだ、竹内さんも人に劣らぬ悩みをもって生活されておいでだと思つた。

広島・長崎で原子爆弾の被害を受けた人、その現場を見た人は、平成六年の現在一億を越える日本国民の〇・一〇・二％に及ばない人数だと思われる。

後の人のために、話し残して置こうと言う気持ちになられたこと、その意欲に敬意を表したいと考える。今七四才の年齢で自営業に頑張っておられるとのこと。その強い気迫でこれからの人生も張り切って生きて戴きたいと考える。

内田 新次

戦後五〇年、その半分と少ししか生きていない私と、人生の三分の二を被爆体験と向き合いながら生きてきた竹内さんの人生。〃初めて人に話すんです。〃と前置きの後、淡々と語られるお話しは〃被爆したことから逃げていた。〃とおっしゃるにはあまりに理路整然として、科学的根拠や専門用語までも出てくるものでした。その三分の二もの時間をきくと不安や葛藤の中で誰にも語らず戦つて来たんだと思うと、原爆の残酷さを改めて

感じました。戦争という愚かな行為の代償というには、被爆者の受けた傷は余りに大きい。日本は過去のつぐないと反省の上で、いまこそそんな人達に国家補償をすべきだと思います。そしてもう一度、アジアの人達に日本が与えた傷のつぐないと共に、アメリカの愚行のつぐないを、世界中が考えるべきだと思います。

多田 由紀子

僕がこの聞き書きボランティアで不安だったことは被爆者の方が思い出すのもいやなことをどのようにして聞けばいいかということだったので、竹内さんにそんな不安をかける必要はありませんでした。たしかに思い出すのはいやかもしれないけど竹内さんはどうだと説明してくれました。おかげで来年行く広島への修学旅行の勉強にもなつたし、自分自身のためにもなりました。一生に二度とはないかもしれない素晴らしい体験をしたと思います。

中学生・男子